

王弼易注の体裁とその形而上学的意義

著者	藤原 高男
雑誌名	漢文學會々報
巻	19
ページ	19-28
発行年	1960-06-26
URL	http://doi.org/10.15068/00148386

王弼易注の体裁とその形而上学的意義

藤 原 高 男

一

周易は、本来、上下経と十翼とは、別行のものであった、と考えられる。それは、十翼尽くが、上下経を注解する体裁の文章であつて、その性質を異にするものであるからである。この経伝別行のことに就ては、三國志高貴郷公紀に

帝又問曰、孔子作象象、鄭氏作注。雖聖賢不同、其所積經義一也。今象象不與經文相連、而注連之何也。易博士淳于俊對曰、鄭氏合象象於經、欲使學者尋省易了也。

と云うによつても、知ることが出来る。また、漢書儒林費直伝に、

費直字長翁、東萊人也。治易為郎、至單父令。長於卦筮、亡章句、徒以象象系辭十篇文言、解說上下經。

と云うものは、「周易の経伝は別行のものであったが、費直に至つて、始めて、伝を以て経に合わせた」ことの証拠とせられる。すなわち

以伝解経、則必以伝合経。経伝之連、実当始自費。非始自鄭也。(周易姚氏学)

と云うが如くである。

斯かる経伝別行の体裁の周易を、現在の型、すなわち、乾一卦は、「卦辭・爻辭・象伝・象伝・文言伝」の順序、坤以下六十三卦は、「卦辭・象伝・大象・爻辭小象交互(坤卦は、さらに文言伝)」の順序、と云う形式にしたのは、誰に始まるか、と云うことは、周易正義以来、問題とせられる所である。孔穎達は、

夫子所作象辭、元在六爻経辭之後、以自卑退、不敢干乱先聖正経之辭。乃至輔嗣之意、以為、象者本釈経文、宜相附近、其義易了。故分爻之象辭、各附其当爻下言之。猶如元凱注左伝、分経之年、与伝相附。(坤卦初六小象正義)

先儒以孔子十翼之次、乾坤文言、在二繫之後、説卦之前。以象象附上下二経、為六卷、則上経第七、下繋第八、文言第九、説卦第十。輔嗣之文言、分附乾坤二卦。

故説卦為第九。(説卦第九正義)

と論ずる。これを要するに、「(1)王弼以前に、彖・象・象伝は、各相当卦経文の後に分配せられていた。(2)各卦爻辞の下に、小象をそれぞれ分配して、経に附したものは、王弼に始まる。(3)文言伝を二部分に分かつて、乾坤二卦の下に分配したものは、同じく、王弼に始まる。」等と言うものである。さらに、「小象を爻辞の下に分配して、爻辞・小象交互の形式としたものは、王弼に始まる。」ことを、坤卦初六象伝に至って、始めて論ずることは、「王弼は、乾卦のみは、小象を爻辞下のに分配しなかった。」と孔穎達は考えていたことを示す。すなわち、「乾卦以外の六三卦に就て、爻辞の下に、小象を分配したのは、王弼である。」と言うのである。

顧炎武は、その日知録において、「(1)伝を経に分配することは、費直より始まる。(2)費直本の体裁は、今の乾卦の如く、六四卦総てに就て、卦辞・爻辞・彖・象・象伝の順序であった。(3)小象を、各卦辞の下に分配したものは、鄭玄より始まる。すなわち、鄭玄本の体裁は、乾卦のみは、費直本の体裁に従い、乾卦以外の六三卦に就ては、卦辞・彖・象・大・象・爻辞小象交互の形である。」と論じ、姚配中は、その周易姚氏学の冒頭において、「(1)伝を以て経に附したものは、費直に始まる。(2)文言伝を、乾坤二卦に分配したものは、此亦費直であらう。(3)小象を、各爻辞の下

に附したものは、王弼以前に行われていた。」と論ずる。

また、皮錫瑞は、経学通論において、姚配中の説を大部分引用し、「錫瑞案、姚氏此説、可為定論。」と称揚する。

これらの説を整理するに、現行の周易の体裁をなした者は

(1)王弼である、とする孔穎達

(2)鄭玄である、とする顧炎武

(3)王弼以前、その大部分は費直に始まる、とする姚配中・

皮錫瑞等となるのである。

一一

然らば、この問題に就て、講周易疏論家義記—義記と略称する—は、如何なる解答を与えるであらうか。

義記の乾卦第二釈彖辞の末尾を見るに、

後人注解、相從卦類而説之。王弼留此乾坤二卦、猶不分配者、欲存其本柄、見其義。且復乾坤教本、欲異雜象者也。

と言う。ここによれば、第一に、「後人注解、相從卦類而説之。」と言う。このことは、次に、「王弼留此乾坤二卦、猶不分配。」と言うのを勘合すれば、「王弼以前に、伝を経に分配した者のある」ことを示す。第二に、「王弼留此乾坤二卦、猶不分配。」とは、「王弼易注においては、乾坤両卦のみは、経と伝とを相分配しない。」ことを言うので

ある。

然らば、その「経伝を分配しない形」とは、如何なる形であろうか。「留メテ分配セザル」王弼易注原来の体裁に従う、と主張する部分、すなわち、乾坤二卦のうち、現存する部分たる乾卦に就て検するに

(第一釈卦辞。…第二釈爻辞。)…第三釈彖辞三重。第一釈名徳、第二釈四徳、第三釈聖人体此徳。…第四釈象三重。第一釈境智相配、第二釈六爻象、第三釈用九。…第五釈文言三重。第一釈名、第二釈体、第三釈四番釈文義。…

と言う順序になっている。すなわち、第二釈爻辞九五以降が残存し、以下、第三釈彖辞、第四釈象、第五釈文言と、明瞭に番号が附せられているから、「卦辞・爻辞・彖伝・象伝・文言伝」の順序であることは、明らかである。換言すれば、現行本王弼易注の「乾卦」の体裁と同一であつて、この体裁が、「乾坤二卦に就て、同一であるのが、王弼易注本来の面目である。」と、義記は主張するのである。

次いで、「経伝を分配した形」とは、如何なるものであらうか。釈實卦冒頭に

離下艮上賁。釈義三重。釈名、次第、釈詞。第一釈名。

…第二釈次第。…第三釈詞五重。卦辞、彖詞、大象、爻辞、小象。釈卦詞三段。釈名、釈徳、別辞。

と言ひ、咸・恒・遯・蹇・解五卦冒頭にも、略々同致の文章が存する。その「第三釈詞五重。」として挙げる順序が、すなわち、王弼易注の姿である、と言ふ。換言すれば、屯卦以下六十二卦に就て、「卦辞・彖伝・大象・爻辞・小象」の順序となつてゐるのが、王弼易注における周易経伝の順序である、と義記は主張する。

然るに、義記には、乾卦以外に、小象を釈する項が残存しない。従つて、この末尾の部分たる「爻辞・小象」の意味が、「六爻爻辞の次に、小象六爻がある」意であるか、「爻辞・小象が交互になつてゐる」意であるのかは、直接にこれを知ることができない。若し、六爻爻辞の次に小象六爻が位する形であるならば、「猶不分配。」と言う乾坤両卦と、大差ない形である。然るに、義記が、「王弼留此乾坤二卦、猶不分配者、欲存其本柄、見其義。且復乾坤教本、欲異雜象者也。」とことわることは、乾坤二卦と、屯以下六十二卦とは、その体裁を大いに異にすることを示すものであるから、恐らくは、「爻辞・小象交互」の形となつてゐることを示す、と考えられる。

また、義記の咸卦釈爻辞の項を見るに

九四、貞吉、悔亡。憧憧往来，知（朋？）從爾思。初物

（衍文？）六，咸其脢（拇？）。王注云、未至傷靜也。六

二，咸其腓（凶居吉）。象曰、雖凶居吉。順不言（害？）

也。九三，咸其股（股）。（執其隨。往吝。象曰、咸其

股）亦不処也。（志在隨人所執下也。）此為所感之境不同、攸脩之行不等。

と云う。このうち、疑問符を附した五条以外の、括弧内の三条は、現行本王弼注周易によって、補ったものである。義記に引用する所の、六二の小象には、「象曰、」がついているが、九三の小象には、「象曰、」がついていない。これは、括弧内の部分を省略して引用したためである。これを、乾卦象伝を引用して、

第一釈境。象曰、天行健。第二釈智。君子自強不息。

第二釈爻、則有六重。第一、潛龍勿用、陽在下也。

第二、見龍在田、德施普也。第三、終日乾々、夔覆道也。第四、或龍在淵、進无咎也。第五、飛龍在天、大人造也。第六、上九亢龍、有悔（脱盈不可久四字？）也。第三釈用九義。吉（衍文）用九、天德不可為首也。

と云う所の体裁、すなわち、「象曰、」は、大象の冒頭にのみ存する形式に比較すれば、咸卦九四爻辞下に引用する所の、六二下の「象曰、」は、義記が依る所の王弼注周易に、本来ついているもの、と考えねばならない。然らば、釈貴卦冒頭にある所の「第三釈詞：爻辞、小象」とは、「爻辞、小象が交互になっている」と云う意味であることの明証と言わねばならない。

以上を要するに、義記の依る所の王弼易注における経伝

分配の形式は、

乾坤二卦……卦辞・爻辞・象伝・象伝・文言伝の順序。

以下六二卦……卦辞・象伝・大象・爻辞小象交互の順序。

となつていたのである。而して、義記は、周易正義序に所謂「江南義疏家」の「論家・疏家」一派のうち、「論家」を代表するものであるから、論家所伝本王弼易注の体裁は、現行本と、坤卦の経伝分配において、異なつていたのである。さらに、義記は、この体裁こそが、「王弼易注の原来の姿である。」と主張する。この主張を示すものが、前引の「王弼留此乾坤二卦、猶不分配者云云」と云う、乾卦釈爻辞末尾の文章である。

斯くて、義記は、「王弼易注 原来の体裁」を説くが、「経伝の分配は、何人に始まるか。」に就ては、単に「王弼以前に、経伝を分配した者がある、」ことを、言うのみであつて、その原始の人を言わない。魏志高貴郷公紀によれば、鄭玄に遡ることを得、漢書儒林費直伝を、姚配中の如く解すれば、費直まで遡ることもできる。

二二

義記の乾卦第三釈爻辞第一釈名徳の項を見るに、

象曰。繫辞云、象者、言乎象者也。王注云、象言二象之材、而論四徳之意。韓曰、象揜一卦之徳。然則象別卦象

之意、開釈象中之理者也。故断暢為義、開觀是意耳。と云う。このうち、「王法云、象言二象之材、而論四德之意。」と云うものは、王弼注であつて、繫辭伝注に、韓康伯が「王弼曰、」として引用し

王弼曰、演天地之数、所賴者五十也。其用四十有九、則其一不用也。不用而用之以通、非数而数之以成。斯易之大極也。四十有九、数之極也。夫无不可以无明、必因於有。故常於有物之極、而必明其所由之宗也。（繫辭上伝第八章「大衍之数五十、其用四十有九。」注）

と云うものと共に、繫辭伝に、王弼注の存したことの明証である。（注二）然るに、陸徳明は、その釈文叙録に於て、

唯鄭康成・王輔嗣所注行于世。而王氏為世所重。今以王為主。其繫辭已下王不注。相承以韓康伯注統之。今亦用韓本。

と論じ、「王弼に、繫辭以下の注なし。」と断言する。而して、義記が、その乾卦第三釈家辞第三釈聖人体四法義の項において、「夫首出之義、通有二種。第一僕射等疏家義云、首出庶物者、境也。」と云つて、疏家の代表として挙げる所の僕射とは、陳の尙書右僕射周弘正であり、陳書周弘正伝・同書儒学張譏伝・兩唐書儒林陸徳明伝によれば、「周弘正——張譏——陸徳明」と言う三世代の師資相承が明らかである。従つて、王弼易注の論家所伝本においては、

「繫辭伝王弼注」が存し、疏家所伝本は、「繫辭以下韓康伯注」を以て、王弼注に代替したものである。さらに、論家所伝本における「経伝分配の状況」（経伝の順序）は、現行本周易（王弼注）とは異なり、別章に論ずる如く、坤卦においても、乾卦と同様、「卦辞・彖辞・象伝・象伝・文言伝」と言う順序になっていたのである。

然らば、王弼易注の疏家所伝本においては、「経伝分配の状況」は、如何であつたろうか。疏家の一員たる陸徳明の周易音義を見るに、坤卦における、掲出文字の順序は、左の如くである。すなわち、

坤・利牝・有攸・喪朋（卦）、必難（卦注）、无疆（象）、必争（象注）、履霜（初）、積善（初注）、始凝・馴（初象）、任其（二注）、知光（三象）、不擅（三象注）、括・囊・无咎（四）、不造・否・閉・施慎（四注）、之飾（五注）、坤至柔（文）、為邪（文注）、余殃・臣弑・由弁・言順・直方大不習无不利則不疑其所行・木蓍・而暢・陰疑・為其・嫌・未離（文）

と云う順序である。これによれば、掲出文字の順序は、尽く、現行王弼注本の順序となつて居る。換言すれば、「卦辞・象伝・大象・彖辞小象交互・文言伝」と言う順序である。（勿論、乾卦及び屯以下六十二卦においては、論家所伝本も、周易音義の依る所のもの、すなわち疏家所伝本も、現行本と、経伝分配の状況は、異なる所がない。）一方、

周易音義の訟卦の条を見るに、

惕 湯歷反。王注或在惕字上、或在下、皆通。在中吉

下者非。

と注する。訟卦卦辭「訟、有孚窒、惕、中吉。」の王注に、窒謂窒塞也。皆惕、然後可以獲中吉。

と言うものの所在を論じたものである。すなわち、

(イ)訟、有孚、窒。〔王注〕惕、中吉。

(ロ)訟、有孚、窒惕〔王注〕中吉。

と言う両型の、何れでも可であるが、現行本のような

(ハ)訟、有孚、窒。惕、中吉。〔王注〕

と言う型は、不可である、と言うのである。斯くの如く、

一方に、王弼注の所在を問題とするにもかかわらず、坤卦の経伝分配の形式（経伝の順序）に就ては、何ら論及する所がなく、孔穎達の周易正義と同一の順序に従っている。

このことは、

(イ)疏家所伝本王弼易注の坤卦経伝の序列が、論家と全く同じ、換言すれば、現行本の乾卦と同形であったものが、後世、現行本の坤卦の形に改められ、それと同時に、釈文の序列をも改めたものであるか、

(ロ)疏家所伝本王弼易注が、現行本と全く同体裁であった、換言すれば、論家所伝本とは異なり、坤卦の経伝の序列が、「卦辭・彖伝・大象・爻辭小象交互・文言伝」であったか、の何れかでなければならない。

両唐書によるに、陸徳明の太宗貞觀初年歿に對し、孔穎達は、貞觀二十二年歿であつて、その生存年代の大部分を同じくし、貞觀初年、陸徳明は国子博士となり、孔穎達は、その前、武徳九年、国子博士を拝し、貞觀十二年には、国子祭酒を拝している。斯くて、孔穎達は、陸徳明に面晤する機会も存したであろうし、經典釈文を見ても居るであろう、と考えられる。然るに、周易正義には、坤卦の経伝分配の異同に就ては、何ら論及する所がなく、むしろ、坤卦初六爻辭疏において、

乃至輔嗣之意、…分爻之象辭、各附其当爻下言之。

と論じて、「坤以下六三卦は、王弼が、爻辭小象交互の形式とした。」と言う。これによれば、陸徳明の周易音義の形式、換言すれば、疏家伝統の王弼易注の「坤卦の経伝の序列」は、現行のもの、同一であった、と考えねばならない。換言すれば、現行本王弼易注の体裁は、疏家所伝本の系統のもの、と考えねばならないのである。

以上によつて、論家・疏家両伝本の、周易経伝分配の形式を比較表示すれば、左の如くである。（現行本は、疏家に同じ。）

乾卦

論家：卦辭・爻辭・彖伝・象伝・文言伝。

疏家：卦辭・爻辭・彖伝・象伝・文言伝。

坤卦

論家…卦辭・爻辭・彖伝・象伝・文言伝。

疏家…卦辭・彖伝・大象・爻辭小象交互・文言伝。

屯以下六二卦

論家…卦辭・彖伝・大象・爻辭小象交互。

疏家…卦辭・彖伝・大象・爻辭小象交互。

繫辭伝以下の注に就て、論家は、王弼の繫辭伝注を忠実に伝承し、疏家は、韓康伯注によつて置換して、王弼易注の原来の姿に、改変の手を加えていることを勘合すると、坤卦の経伝の序列、換言すれば、周易の経伝分配の形式は、論家所伝本が、王弼注の原来の体裁を伝え、疏家所伝本は、現行本の如く、変改したものではなからうか、と考えられる。すなわち、王弼易注の「経伝分配の形式」「繫辭伝以下注」に関する諸本の系統図を想定すれば、左の始くになるであらう。

王弼易注原本——論家所伝本

疏家所伝本——現行本

四

抑々、易の本来の立場は、陰陽二元論である。王弼が、この易の本来の立場に忠実である限り、論家所伝本の体裁を採つたであらう、と考えねばならない。何となれば、論家所伝本の体裁は、乾坤兩卦を同等に重んじる立場であ

り、従つて、乾坤二元論＝陰陽二元論の立場であるのに対し、疏家所伝本の体裁、すなわち、現行本の体裁は、乾卦のみを重んじるものであり、乾卦一元論の立場であるからである。斯くて、疏家所伝本の王弼易注は、変改の手が加えられている、と考えねばならないのみならず、易説においても、疏家は、王弼の説を変改し、發展せしめているのに対し、論家は、王弼説を、忠実に祖述し、墨守せんとする態度が見られる。

義記の賁卦第三釈詞第一釈卦辭の項を見るに、

第三釈別辭。小利有攸往。

僕射等通。夫剛健之性、理宜進求、文柔之弊、事當退止、賁也。文德唯為沖靜。若其往也、不得大宜。以文靜居、還成聲行。

今有攸往。故得少利身。今義小異。直案卦德、略如旧通、捨別其義、非如通耳。何則今案彖詞、亦依王注、乾坤相交、剛柔相饒。故成天地之化、而造文饒之世者也。故亨德對於坤之女、小利譬於乾家之男。男往失位。故小利。女來得位。故得亨。賁世之象、德行在此。

と論じる。これによれば、疏家の領袖たる僕射周弘正は、賁卦の卦辭「小利有攸往。」を説くに、「艮剛離柔の性」のみを以て立論する。此に対し、論家を代表する所の義記は、周弘正の説を、「旧通ナリ」として貶斥し、彖伝の説を参考し、王弼が彖伝に注して、

剛柔不分、文何由生。故坤之上六、來居二位、柔來文剛之義也。柔來文剛、居位得中。是以亨。乾之九二、分居上位、分剛上而文柔之義也。剛上文柔、不得中位、不若柔來文剛。故小利有攸往。

と言うものに依拠して、「爻の往来・升降」説を採用する。而して、此の王弼説は、周易集解に用いる所の荀爽の説

此本泰卦。謂、陰從上來、居乾之中、文飾剛道、交於中和。故亨也。分乾之二、居坤之上、上飾柔道、兼挾二陰。故小利有攸往矣。

と言うものに同致であつて、象数派易学の常套理論を使用するものである。勿論、王弼の易学は、義理を以て貫かんとするものであるから、象数を払拭し去るの極、疏家の説の如きに進むのは、当然の勢ではあるが、これは、論家の墨守、疏家の發展の一例、と言うべきである。周易音義の蠱卦の条を見るに、

以振 旧之慎反。濟也。師說音真。振振仁厚也。

(四部叢刊本)

以振 旧之慎。(敦煌本)

と注する。すなわち、蠱卦大象の「君子以振民育德。」と言う「振」字を、王弼は注して、

蠱者、有事而待能之時也。故君子以濟民育德也。

と言ひ、「濟」字を以て解するのを、陸徳明は「旧説ナリ」

とし、師たる張譏の説「仁厚也。」と言うものを挙げるのである。これもまた、王弼易説を、疏家が改めた一例である。斯くて、論家所伝本の「経伝分配の体裁」が、王弼易注の原来の姿であり、疏家所伝本の体裁は、後人の変改の加わったものであらう、と推定するのである。

五

以上の推論が認められるならば、すでに前章において指摘した如く、王弼の立場は、乾坤二元、すなわち陰陽二元論でなければならぬ。これは、繫辭上伝第十一章に

是故易有大極。是生而儀、兩儀生四象、四象八卦。

と言う所の「大極一元論」に従うものではなく、繫辭下伝第五章に、

子曰、乾坤其易之門邪。乾陽物也、坤陰物也。陰陽合德、而剛柔有体。

と言う所のもの、あるいは文言伝の立場に従うものである。

また、復卦大象に、王弼は注して、

方事也。冬至陰之復也。夏至陽之復也。故為復、則至於寂然大靜。先王則天地而行者也。動復則靜、行復則止、事復則无事也。

と言ひ、すなわち、「先王則天地而行者也。」とは言ひが、

「道ニ則リテ行フ。」或いは「地ニ法リテ行フ。」とは言わないのである。王弼の周易解経の根本的立場を示す周易略例明象章に、

言者所以明象、得象而忘言。象者所以存意、得意而忘象。猶蹄者所以在兔、得兔而忘蹄、筌者所以在魚、得魚而忘筌也。然則言者象之蹄也。象者意之筌也。

と言うものは、莊子外物篇の「筌蹄の譬」を用いたものであり、復卦象伝に注して、

復者反本之謂也。天地以本為心者也。凡動息則靜、靜非對動者也。語息則默、默非對語者也。然則天地雖大、富有萬物、雷動風行、運化萬變、寂然至无、是其本矣。故動息地中、乃天地之心見也。若其以有為心、則異類未獲具存矣。

と言う所の「寂然至无、是其本矣。」とは、老子第四十章の「天下萬物生於有、有生於無。」に基づくものである。

斯くの如く、王弼の易注は、老莊の思想を以て易を解するものであるが、若し、王弼が徹底して、老莊を以て易を解し、「道」或いは「無」一元論の立場を取るものならば、復卦大象注は、老子第二十五章の四大の説、すなわち

故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。人法地、地法天、天法道、道法自然。

と言うものに學んで、「自然ニ則リテ行フ者ナリ。」或いは、「地ニ法リテ行フ者ナリ。」とすべきであらう。然るを、

「則天地而行者也。」と注するのは、復卦象伝の「復其見天地之心乎。」と言う語にひかれたものとするも、二元論の片鱗を示すものであらう。

晉書紀瞻伝を見るに、

与榮同赴洛、在塗共論易太極。榮曰、太極者、蓋謂混沌之時、曖昧未分。……老子伝、有物混成、先天地生。誠易之太極也。而王氏云、太極天地。愚謂、未當夫兩儀之謂。……今若謂太極為天地、則是天地自生、無生天地者也。……瞻曰、……老氏先天之言、此蓋虛誕之說、非易者之意也。……意者、直謂太極、極尽之称。言其理極、無復外形。外形既極、而生兩儀。王氏指尚、可謂近之。古人拳至極以為驗、謂二儀生於此。非復謂有父母。若必有父母、非天地其孰在。榮遂止。

と言う。すなわち、西晉元嘉の初年に、紀瞻と顧榮とが、同じく洛陽に赴く途中、易の太極に就て相論じ、顧榮が、「太極天地。」と言う王氏の語を引用し、それに駁論を加えたのに対して、紀瞻は、「太極と言うのは、極尽の称である。」とし、王氏の説を支持した、と言うのである。王氏の「太極トハ天地ナリ。」と言う一語は、前章來論ずる所の、王弼の「乾坤二元論」と、その致を一にするものである。何となれば、顧榮と紀瞻が相論じた所の「易之太極」とは、繫辭上伝第十一章に、「是故易有大極。是生兩儀、兩儀生四象云云。」と言う所のものであり、王氏の「太

極天地。」と言う語によれば、「天地生兩儀、兩儀生四象云云。」となつて、生成の根源を、普通に考える所の「太極一元」に帰するものではなく、「天地二元」に帰するものだからである。韓康伯は、繫辭下伝第一章に注して、

剛柔相推、況八卦相盪、或否或泰。繫辭焉而斷其吉凶、況之六爻動以適時者也。立卦之義、則見於象象、適時之功、則存之爻辭。王氏之例詳矣。〔注二〕

と言う。すなわち、王弼の周易略例、明彖・明交通變・明卦適變通交・明象等の諸章を要約して、繫辭伝に注し、「王氏之例詳矣。」と言ひ、王弼を「王氏」と呼ぶ。また、陸德明は、その釈文叙録に於て、「唯鄭康成・王輔嗣所注行于世。而王氏為世所重。」と論じ、王弼を「王氏」と呼ぶ。以上の「内容の一致」「称呼の例」を勘合すれば、晋書紀瞻伝の「王氏云、太極天地。」と言う「王氏」とは、王弼であらう、と考えられる。果して然りとすれば、「太極天地。」と言う語は、王弼の繫辭伝注の佚文である、と考えられ、さらに、繫辭上伝の「太極一元論」の立場と、王弼の「乾坤二元論」の立場との矛盾を、氷解せしめるもの、と言うべきである。

六

以上を要するに、講周易疏論家義記の乾卦第二釈爻辭末尾の文章によつて考えれば、王弼易注における「経伝分配」の原来の体裁は、乾坤兩卦は、「卦辭・爻辭・象伝・象伝・文言伝」と言う順序であり、屯以下六二卦は、「卦辭・象伝・大象・爻辭小象交互」と言う順序であつた。この原来の体裁を伝えるものが、論家所伝本であり、現行本の体裁は、変改の手の加えられた、疏家所伝本の系統である。

而して、論家所伝本の体裁、すなわち、王弼易注原来の体裁は、王弼が、周易解釈に當つて、「乾坤二元論」の立場を取つたことを示し、繫辭上伝の「太極一元論」の立場と矛盾するものであるが、王弼は、「太極天地。」と解釈することによつて、その矛盾を氷解せしめたのである。

〔注一〕 漢文学会報第十八号、拙稿「王弼繫辭伝注の存否について」を参照。

〔注二〕 詳細は、拙稿「王弼繫辭伝注の存否について」を参照。

（吉田良立高松高等学校教授）